

放射能汚染禍の日本の子どもたちの姿を世界に伝える 虫を怖がり、土をいじれない“自然剥奪症候群”の園児たち

新医協会長 岩倉政城

世界に向けて、日本の核発電所事故の放射能汚染で6年を経過した今でも子どもたちの外遊びが制限されている実情を報告しにクロアチアを訪れました。

旅客機から見下ろすサヴァ川は兩岸に深い森を伴い、河川を土手で固めて川幅を縮める日本とくらべて自然と共に暮らすクロアチアの優しい風土を感じました。

保育園の園長や放射線の専門家を含む尚絅学院大学放射線研究班の一行6名で世界幼児教育・保育機構（OMEP）*の国際大会にのぞみました。

園を一步出るとそこは

初日の6月22日には福島の子どもの保育園敷地内外の放射能汚染実測値と繰り返した除染の効果が限定的であることをポスターで発表しました。家屋敷と田畑しか除染していないため、核発電所爆発から6年経った今でも発電所25km圏では園を一步出ると放射能が高く、散歩や遠足の制限が続いています。畑活動はおろか、園庭の果樹類も未だに食べていません。

自然を怖がる子どもたち

翌日には、長く外遊びの制限を受けた子どもたちが「虫を怖がる」、「土を触れるのを嫌がる」という姿を映像と共に口頭発表しました。そしてそれを「自然剥奪症候群」と新たに命名し、今後も子どもの発達に影を落とす可能性に触れました。



（写真説明：泥団子を作る子ども）

右の子どもは汚染の少ない宮城県の3歳児で見事に作り上げていた。左は核発電所から25kmの園で外遊びを制限されてきた5歳児。安心して泥遊びが出来るようにとバスを仕立てて2時間かけてこの園を訪れた。泥団子をこねる手つきが稚拙で、このあと泥はボロボロと掌からこぼれ、ついに作れなかった。）

会場は満席で、私たちの発表に驚きのあまり嘆息やざわめきが漏れました。報告が終わると同時に満場からの拍手が湧き、会場を辞する私たちに駆け寄り、イギリスなどヨーロッパの国々の聴衆から口々に驚きや義憤が語られました。

発表後も呼び止められてドイツ、フィンランド、ノルウェー、韓国など多くの人が「子どもたちの映像を見て胸が締め付けられる」、「こんな汚染を子どもにもたらしはならない」、と感想を述べてくれました。また「日本は再生可能エネルギーへの転換は図られているのか」との質問もありました。停止していた核発電所が次々と再稼働している現状を話すと顔を曇らせていました。

(写真説明：各国から次々と声をかけてくれた。

閉会式のあと我々の発表への感想を述べに来てくれたスウェーデンの参加者。子どもたちの映像に心が痛んだと手を胸にあてて語った。また、チェルノブイリ事故のあと牛乳を飲めなかった体験も。)



また、ドイツの参加者からは、国民的な世論で核発電所の全面廃止を勝ち取ったことや、隣国オーストリアの核発電を止めるドイツ国民の活動がオーストリアの政府を追いつめ、廃止に向けて舵を切らせた経験を述べてくれました。

イギリスの参加者からは、自然剥奪症候群はチェルノブイリでも見られたのか、ちかごろの子どもたちが自然と触れ合う機会が減っていることと、我々が提案した自然剥奪症候群の違いは何かを問うものでした。チェルノブイリの子どもたちが自然と触れ合う機会を奪われたか、については今後の調査課題としたいと応えました。また、テレビやゲーム漬けで自然と接しないのとは異なり、“剥奪”を使ったのは電力企業とそれを進めてきた国が子どもから自然を奪ったからこそ自然剥奪症候群と名づけたと応えると、深くうなずいていました。

東日本という日本の一隅で私たちが直面している放射能汚染の体験を海外にも訴え、一旦事故が起これば制御不能な核発電をこの地球から無くす活動を続けることを改めて決意した国際大会でした。

* : O M E P : (O r g a n i s a t i o n M o n d i a l e P o u r l ' É d u c a t i o n P r é s c o l a i r e) (仏 語) の 略 称 ユネスコ協力の NGO で 56 カ国が加盟。主な目的は幼児教育・保育の向上に影響を与える研究・援助と人類の相互理解に貢献し、ひいては世界の平和に寄与する。